

これは、城北中学校第一期生の文集である。

百八十名近くいた同期生も、今では同期の会を開いても十五名位しか集まらない。

そこで、この残り少ない機会をとらえて、あの中学校時代の各自の思い出を綴って、一冊の本にまとめ、後に残そうと有志一同の賛同の上、同期の会世話人のお力で、このようなものになった。

思うに、せいぜい十二歳頃から、十六、七歳位までの人生の間の四年間の出来事だが、あの過酷な時代を過ごした経験は今でも各自がいただいている鮮明なものと思っっているこの四年間は丁度あの大東亜戦争と重なっている。

戦争末期では 勉強どころではなく、食うに事欠き、級友の中では戦災に会った者も多く、今考えると、何を食べ、何処でねて起きていたか、考えてみると、よくぞと思うのは全員であろう。卒業式もはつきりとした記憶なく、各自は戦後の荒波の中にほうり出され、自分の進路を進むことになる。ふりかえってみると長いようでもあり短いようでもあった。

この文集は同期の友の中学生時代をふりかえって書いていただいたが、あゝいう事もあったかとか、こういう人もいた、あの時はこうだったとか、今更のようにいろいろな事が浮かんでくると思っっている。それは映画の一コマ一コマのようできえある。

あの戦争体験は風化させてはならないし、あの戦争時代のはなしは、もう我々の世代で話す人も絶えていく。そこで残り少ない同期の友をわずらわして後世に伝えようとしたのである。

寄稿された同期の友に改めてお礼するとともになお今後もお互いに元気で頑張ろうと言っておきたい。